慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	平等思想の学理的根拠
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.2 (1924. 2) ,p.178(24)- 190(36)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240217-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平等思想の學理的根據

瀧本誠一

學問の進歩は切磋の功であつて、文化の發達は異種相磨するの賜である、人間社會は形體上にも精神上にも、多種異樣にして、大小長短、強弱剛柔、嗜味貌色、各々其の趣を異にするに依つて、始めて以て、社會の組織を完ふするのである。若夫れあらゆる組織分子が悉く同種にして、何等の差等もなかつたならば、進歩もなければ發達もなく、單調平凡、我々人間に最も堪へ難き停滯不進の惡現象を呈するならん。

然るに人間の世の中には此の多種異樣の効用を否認し、故らにホモヂニーティを崇拜して、飽く迄も單調平凡ならん事を熱望し、甚だしきは之を以て人間の使命であるかの如く確信する者あるは殊に怪しむべきの極みであるが、斯くの如きは畢竟社會發達の原理に暗く、科學の一端すら窺ひ得ざる無智無學の輩に雷同するの謬想であつて、學理上更らに何等の根據をも有せざる俗說たるを免かれざるのである。然れども余が玆に特に研究を試みんとするは此の俗說の一部分であつて(一)人間は過去に於て社會的に經濟的に、果して平等なりしか(二)將來或は平等になり得るか(三)將又平等ならざる可らざるかの三點である。

有史以前の社會狀態は姑らく之を不問に付し、太古の社會に於ては、強き者は弱き者を壓し、智ある者は愚なる者を役し、貴の賤を凌ぎ、富の貧を制し居たるが如きは最も明かなる事實であつて、例へば太古に於ては洋の東西を問はず何處にても一般に奴隷制度を是認し、或る意味に於ては此の制度がなかりせば、其の社會の進歩發達は到底期圖し得られなかつた位であつて、アリストツトルの如き大賢ですら、奴隷制度の必要を認めて居たのである。或る有名の歷史家が太古の文化は悉く奴隷制度のお陰であると放言したることありしが、コレは必ずしも過言にあらざるべしと思はる。

上下貴賤の差別は比較的後世に起つたものにあらず、人間が社會生活に入らざる以前禽獸と同じく山野を驅け廻はりて衣食を漁りつゝあつた時代はイザ知らず、苟も不完全ながら社會生活を爲し、各々部落を作つて定住する時代となつては

夫れ〳〵族長、酋長、家長の如きもの現はれ、命令する者もあれば命令を承くる者もあるべく、支配する人、支配さるゝ人などの區別も自然に、成立して、上下貴賤の階級を生じたることは勿論であつて、是等の事實を證明するものは決して乏しくないのである。然らば人間社會は其の原始時代より或る形式に於て社會的に經濟的に何等かの區別が存在し居たることは、余の辯を待ざる所であつて、歴史は明かに人間の平等生活を認めて居らないのである。

人間は生れながら平等である、天は人の上に人を造らずと云ふことは十八世紀以來所謂る水平論者(Levellers)が盛に高調したる所なれども、元來この語は全然事實に基かざる非學問的の妄想に過ぎないのであつて、人間は何れの時代にも何れの國土にも生れながら平等であつたことは曾て之れなく、身體の强弱生命の長短、心性の明暗、能力の優劣、其他天賦の賜は萬人が萬人皆悉く異つて居つて、甲乙何れも平等でなかつたことが事實である。故に露國の學者リオンチェフ(Leontyeff)はペイヴンチン基教の教理を説明して「現世即ち政治的の階級組織(Hierarchy)は天國の階級組織の反照である、教會は天人(angels)でさへも、彼等の仲間中に貴賤上下ありと云つて居るが故に天國にも人間社會にも平等なることは決して之れあることなし」と明言し、又ルーテルさへも「浮世の王國は人間の不平等なしには成立し能はず」と云つたのである。然らば十八世紀の水平論者が人間は生れながら平等であると説いたのは、既往若くは現在の事實を云つたものではなく、單に自己の希望を述べて、斯くアレがしと云つたことに過ぎないと解釋するより他にしかたがないであらう。

果して斯くの如き解釋にして其の當を得たりとすれば、將來事實上水平論者の希望するが如く人間が社會的に經濟的に平等になられ得るや否が先づ最先に解決を要する問題であるが、余は此の點に於ては遺憾ながら學理上斷じて平等になり得べしとは考へないのである。

人間社會に平等思想の實現を期し得らるゝや否の問題を解決するに於ては固より現在の不完全なる人間を前提としての問題であつて、一點の不善もなく利己心もなく、無我無欲にして完全無欠なる人間社會が出現し得らるゝものと假定するときは自ら異なりたる結論に到達すべしと雖も、現在の人間を前提として之を

論ずるときは社會的にも經濟的にも、平等思想の實現を希望することは、明かに架空の希望であつて、月世界の旅行を企つるよりも一層無理の注文であると云はねばなるまい。社會的にも經濟的にも相成るべく多數人の上に立つて、一般に尊尚敬仰の目的たらんことを欲するは何人にも免かれ難き人情であつて、地位階級の不平等は此の場合に於ては其人の爲めに最も熱心に欲望せらるゝ所である。而して其の地位階級の下賤なるものはソレと反對に平等を欲望すること最も熱心なるべきは當然の事であつて、人間社會は平等の中心點に一つの水平線を畫し、ソレ以上と以下との立場に依つて全く正反對に其の利害を異にするのである、即ち水平線以上のものは平等の爲めに水平線に引下げられることを嫌ひ、水平線以下のものは平等に依つて水平線まで引上げられんことを欲するのである。是れ即ち普通の人情であつて、人間は何事に依らず他人に勝り秀でゝ上位を占むることを最上の快事となし、之に反し他人の下位にあることを不快として、何でも彼でも之を避けんとするは普通一般の特有性とする所なれば、人間社會に不平等の存在する間は勿論平等論の消滅することなかるべきも、萬一其の平等論が事實上に實現せられて、地位階級一切消滅して、社會一統水平に歸したるときは、即ち又直ちに不平等を生ずるの時であつて、他人の上に立ち他人に勝らんとする人間固有の性は、智力若くは腕力に優れたる强者をして、自ら他人を凌駕し、一頭地を拔いて衆人の伍伴を脫せしめ、忽ち又現在に異ならざる地位階級を現出すべきは理論上必然の結果であつて、人情勝つことを好むと云ふ最も强大なる特有性の消滅せざる限りは、上下貴賤の差別は如何にしても、人間社會に免かれ難き現象である。

之を要するに現在の人間社會に於て社會的に又經濟的に平等思想の實現を希望すると云ふことは、妄想の最も甚だしきものであつて、人間其のもの、心性を誤解した過ちに坐するものなることは明かである。十八世紀の政治哲學者（就中水平論者と稱せらるゝ人々）等が斯くの如き架空の謬說を鼓吹して、將來或る時代に於て實現し得べしと希望したものとすれば、ソレこそ其の人々の心理狀態を疑はねばならないのであるが、若し或は彼等に於いても、平等思想の實現は必ずしも企圖する所にあらず、單に學理的の理想として、平等の必要を說き、將來の人間社會は出來る限り手段を竭くして地位階級の打破に努力し、實行の可能と不可能とを問

はず、此の思想の普及を圖らねばならないと云ふならば、或は一理なきにあらざるも、果して然りとすれば第三の問題として人間社會は平等ならざる可らざる理由あるや否の點を解決し、其の理由之れありとすれば彼等の主張は學理として認められざるにあらざるも、若し全然その理由なしとすれば、平等思想は到底何等の根據をも有せざる妄誕の說として學籍より排除すべきものと認むるの外ないであらう。　余は次ぎに此の點に論及せんとするのである。

アダム・スミスは其の著富國論に於てケネーの學說を批評した所にコウ云つて居る、曰く「經驗の示す所に依れば人間の身體は何等の點から見ても種々雜多の營養の下に其の健康を保持するものであつて、或は一般に健康上餘り宜しからぬと信ぜられて居る營養の下ですら、完全に健康を進め得らるゝのである、元來人體の健康狀態は其の中に於て人智を以て測り知るべからざる保持の主義（Principle of preservation）を有し、多くの場合に於ては甚だ誤りたる營養の惡効果すらも、或は防止し、或は補正しつゝ健康を進めて居るのである、……彼は（ケネーを指す）政治團體（政黨の意味にあらず政治の目的で集合團結して居る人間社會を云ふ）に於ては各人が自己の生活狀態を改良せんと勉めつゝある自然の作用が、取りも直さず、多少、或は偏頗なる或は抑壓なる經濟的惡效果を防止補正する保持の主義であると云ふことを考へなかつたようである、……若し國民が完全なる自由と完全なる正義の存するなくしては隆盛なる望みなしとすれば、世界は曾て隆盛なる國民を目擊することなかるべし」と（キャナン版第二卷一七二頁實にこの通りの事であつて、複雜なる人間社會は有形上にも無形上にも種々異樣異種の組織分子が混同して、相互に防止し、相互に補正して各々其の欠點を矯めつゝあるのみならず、智愚、强弱、貧富貴賤、上下君臣の科、千差萬別なるに依り、始めて以て社會の健康狀態が保持せらるゝのである、一統に單調平凡であつて、仰いで上に昇り、伏して下に降るの段階もなく、總てが同等同級のものであつたならば、進步發達と云ふことは絕對に企圖し得られないであらう。ボーダン（Bodin）は社會的ホモジニイテーの首唱者として知らるゝ人なるも、彼れですら、市民は地位に於ても權利に於ても、又身分に於ても總て平等を必要とする事なきを說き「貴族は社會的政治的の制度として必要である、婦人は男子と異つて家庭以外の公務には適當せず、人々の社會及國家に於ける

地位を決定するには各々其人の職業に依るべし」などゝ考へ居たるは（ダニング政治學史第二卷九四に引用す）左もあるべき意見であつて、平等が社會的にも經濟的にも必要であると云ふ理由を學理上明白適確に論じたるものは余の未だ曾て聞かざる所である。

若し世の中が眞に平等水平であつて、尊い者も尊はれず、豪い者も豪らしとせられず、宛もスペンサーが英雄豪傑に對するが如き思想が實現せられたときは、アレキサンダーやナポレオンの如き自己の野心の爲めに數十萬人數百萬人の生命を犧牲にするが如き暴虐者は或は其の跡を絶つて、所謂る世界的平和の希望も達せらるべきも、其の代はりには美術界、文學界、事業界若くは政治界などに於いて歷史上に大名を揚ぐるが如き大人物も亦其跡を絶つて現はるゝことなく、人間社會は全く火の消へたるが如く、光彩もなく生氣もなく、停滯不進の域に沈淪すべきは必然であつて、而かも啻だ停滯不進に止まらずして、勢必ず退歩墮落を免かれず、遂に久しからずして腐敗潰亂の極に陷るべきは自から明白なりと云はざるを得ず、凡そ人間社會は個人と同く常に新鮮の空氣を呼吸し、新陳代謝の手續を圓滑に行ふにあらずんば漸次腐敗して收拾すべからざるに至るべきは理の當然であつて、平等論實現の歸結は必ず此の極に及ばざるを得ないのである。マロック曾て社會平等論を著はし「商業上新たなる通路を發見し、種々の新工夫に依つて世界を富ましし、アラユル自然力を人間の利用に供せしめたるが如き幾多の大豪傑は常に主として何等かの社會的不平等を欲求する野心に刺戟せられたる結果に外ならず」と（Social equality 二〇〇頁）云つて居るが、彼も亦痛論せる如く工夫發明の類に限らず、平生最も平等思想に接近し居る哲學者文學者詩人などの傑作物でも、段々詳かに其の根本を穿鑿すれば、矢張多くは其の學問創作に於て、他人に凌駕せんとする野心の成功に過ぎないことは蔽ふ可らざる事實であつて、何程仕事そのものゝ爲めにする仕事であつても、世上に尊ふべきを尊ばず、豪い者も豪いとせずして、一樣に皆平等水平の取扱を爲すの社會であつたならば、決して超越卓拔したる傑作の現はるべき機會は得られないのであらう。然らば平等思想の實現は幸に不可能なるが故に、敢て之を恐るゝに足らざるも、若し萬一實現の場合ありと假定すれば、其の時には最も恐るべき一つの塊然たる死世界を現出すべきや、余の言を待ざる所で

あらう。

平等が何故に是なるかと尋問すれば、多數の人は必ずソレは解答を要せざる自明の理であると云ふであらう。然れどもコレは中々容易の問題にあらずして、學理上之を是認する理由を發見することは到底不可能にあらざるかと思はるゝのである。人間は生れながら平等である、天は人の上に人を造らずなど云へることは、素より事實にあらずして、人間は生れながら總て盡く不平等であり、天は確かに人の上に人を造つて居るとすれば、コレ等のことを前提として、平等の學理的根據とすることは勿論出來ないのである。平等は社會進步の要件であるかと云へば、是れ亦必ずしもソウではなく、社會に優劣尊卑の差等がなかつたならば、發明工夫に對する刺戟はなくなり、學問事業に對する功名心も起らずして、單調平凡、不進不動の狀態に止まるであらう。平等は正義觀念に合致し、人道に適應するかと云へば、人格の立派なる君子人に相當尊敬の地位を與へ、正しき勤勞に依つて富を造りたる者にソレだけの所有を保護してやることが、正義觀念に矛盾するか、人道觀念に抵觸するか、は余の辯明を待ざる所であらうが、世俗一般に平等を以て正義人道に適へるものと信ずるは平等其のものを水平の意義に解せずして、價値功勞相當の意義に解し、例へば何の誰は價値ある人格者なるが故にソレ相當に尊重し、何の某はドレ程の勤勞者なるが故にソレ相當に厚遇すべしと云ふの意味ならば、世俗に所謂る平等は眞の平等にあらずして、正しき階級は之を平等として是認するのである。若し夫れ然らずとすれば、世俗に於て平等を以て正義人道に適へるものと信ずるは、何の意義もなく、單に平等そのものが正義人道であると、獨斷的に思惟するまでの事であつて、何故に平等が正義人道に適へるかと云ふことは曾て解し得ざるの言であらう。然らば何れの點より之を觀察するも平等を是認すべき理由は全然之れなきかと云へば、余は學理上に於ては斷じて之を是認するの餘地なきも便宜上之を是認するの理由は確かに存在すべしと信ずるのである。

現在の社會に於ては世界何れの邦國でも貴者富者知者賢者は其の數甚だ少なくして、賤者貧者愚者不肖者は云ふ迄もなく其の人口の大多數を占むるのである。故に平等に反對する者は少數であつて之を贊成する者は大多數である、平等は誤謬であつても不合理であつても、此の社會を組織する大多數の要求であると云ふ

ことは疑ひなき事實であつて、之を是認すると否とは全く學理上の問題にあらずして便宜上の問題である、之を歷史に徵するに平等の叫び聲を最先に揚げたる者は空想に耽る學者であつて、之を利用し、之を鍛錬して政治上に於ける倔强の武器となしたる者は政治運動に沒頭する政論家である、初めはメタフィヂシャンの工夫に成れる想像的の人間社會を實在の人間社會と取違へた錯誤に基きたる謬說に過ぎなかつたのであるが、ソレが、不幸にして政治運動を事とする人々の手に渡つてからは、不思議にも眞に偉大なる勢力を振り廻はし、民衆政治の空氣を呼吸しつゝある國民にあつては、其の大多數を占むる下層蒙昧の人々間に於て、强固動すべからざる信條とはなつたのである。成田の不動の本性はイザ知らず、豐川稻荷の正體は何であるか、知らざるも、既に多數の信仰ある以上は、或る何等かのレゾーン・データーを有することは明かである、平等思想が人間大多數の信條となつて、倔强の武器として、利用せらるゝ間は便宜上之を是認すべき理由は唯だ一つの必要である、余は此の便宜上の必要の外には之を學理上に是認すべき何にものもなしと斷言するに憚らないのである。

直接配給の原理と其限度（上）

（社會的勞働組織としての配給組織其三）

向井鹿松

一

「社會的勞働組織として配給組織」其二に於て現代配給組織存在の理由を論ずるに際して、余は今日の直系配給組織は勞働協同の原則によるものであつて、分業の原則に基くものでないと云ふ自說を述べた。（本誌第十七卷第十號）換言すれば大量生產物の配給の爲めに要する仕事の量は一生產者の一ヶ所に在りて處分し得る勞働の能率以上に出づるもので、此結果として特別の配給機關の存在を必要とするものであるから、此理を知らずして直系配給組織の短縮、直接配給の可能を信ずるのは猶千貫の石を一人にて運ばんとするの類なる所以を論じた。而して其際余は專ら配給勞働の見地より論じたのであるが、同一の理由は又資本の見地か